

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2008年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
指導教員	所属・職名	氏 名	
	異文化コミュニケーション学部教授	小山 亘	印
自然・人文の別	自然 ・ (人文)	個人・共同の別	(個人) ・ 共同 名
研究課題名	コミュニケーションにおける「気」：日本・中国・韓国の比較		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科 博士後期課程 2年	瀬端 睦	印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
研究期間	2008	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

「気」は中国起源の思想であるが、朝鮮、日本へと伝えられ、それぞれの文化で独自の変化を遂げた。中国では「気」を「物質的単位」と捉えたり、韓国では「気」を「万物の質的根拠」と考えたりするが、日本では、「気を配る」や「気を使う」等の「对人的な注意の働かせ方」に関する精神面が強調される。そうした「気配り」や「気遣い」はコミュニケーションの問題に他ならないが、「気」は主に哲学・医学・言語学等の分野で研究されてきており、実際のコミュニケーションにおける「気」の学術的研究は殆どなされてこなかった。そこで、本研究は、「気」を日本・中国・韓国の異文化コミュニケーションの問題と捉え直し、人びとの日常のコミュニケーションにおける「気」を探究しようとするものである。書籍、ビデオ資料、インタビュー資料を基に、日本・中国・韓国での「気」に関する言語表現、相互行為、感情の関わりを調査する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[異文化コミュニケーション] [気] [日中韓]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

日本・中国・韓国における「気」は現在、それぞれ異なるものとなっているが、共時的差異と共に通時的差異も認められる。古代中国における「気」と現代中国における「気」は異なっており(小野沢ほか, 1978)、同様のことは、日本・韓国においてもいえるだろう(前林ほか, 2000)。古代日本における「気」の概念、宋儒学・朱子学における「気」の概念、理気二元論、伊藤仁斎の「一元気」の概念(土屋, 2004)等と、現在の日本人の日常的コミュニケーションにおける「気」には隔たりがあると考えられる。本研究では、そうした種々の乖離、差異の多様性を踏まえたうえで、近現代で行われている日常のコミュニケーションにおける「気」の現実をまず明らかにすることに焦点を置き、「気」に関する多様な言説を記述することを主な目的とした。

「気」に関する研究はさまざまな分野で行われているが、以下の5つに大別できると考えられる。1) 中国起源の思想展開についての研究、2) 文化論の類、3) 言語学的研究、4) 東洋医学における研究、ほとんどなされていないが、5) コミュニケーション研究である。

思想の展開の研究では、日本・中国・韓国においてそれぞれの流れが存在しており、また互いが与え合ってきた影響についても述べられている(小野沢ほか, 1978; 前林ほか, 2000)。文化論の類では、日本に関するものや(赤塚, 1990&1996; 土居, 2007; 山本, 1997)韓国に関するものがあるが(小倉, 1998&2001)、「気」という言葉の存在が文化の存在に結びつけられて述べられるのが特徴である。言語学的研究では、「気」一語を歴史的に研究したもの(佐藤, 1996)や韓国語と日本語の比較対照研究(鄭, 1996)、「ポライトネス」と「配慮表現」の関わりや日中比較対照研究を行ったもの(彭, 1996&2004)等がある。また、Hasada(2002)では身体部位表現の一つとして「気」が取りあげられている。概して、言語学では「気」の「意味」に関する研究が中心である。東洋医学の研究では、人体内部、あるいは、人体外部に流れるエネルギーとしての「気」を脳波・赤外線・電磁波・超低周波などの測定によって科学的、実証的に研究する試みがなされている(湯浅, 1991)。コミュニケーションにおける研究は、ほとんど行われておらず、部分的に扱った研究や(Rosenberger, 1992 & 1994; Nagata, 2002; Borovy, 2005)、理論的モデルを提示している研究(Chungほか, 2003; 濱野, 2003)があるのみである。

本研究では、まず、近現代日本における「気」に関する言語表現、実際の相互行為、感情について、「対人的な注意の働かせ方」に焦点を当てて調査するため、書籍、ビデオ資料、インタビュー資料を分析した。書籍の調査では、『青空文庫』(2008)と『新潮文庫の100冊: CD-ROM版』(赤川ほか, 1995)に収められている小説を検索した。言語表現の分析では、小説というジャンルの書記言語においてではあるが、「気遣(使)い」の使用が減少傾向にあり、「気(を)使(う)」の使用が増加傾向にあることから「気配・様子」「心配」「～はず」等の幅広い意味をもっていた「気遣い」の意味範囲が限定されたものへと変化してきており、そうした通時変化から「気遣い」の使用頻度が減ってきていることが認められた。一方、「気を使う」の使用が増加しており、「気」が内から外へ表れ出るものから「使用する」「操作する」ものへと変わり、また、「気」の焦点が事柄・植物・動物から人間に移ってきている傾向も示唆された。相互行為の分析においては、「渡す」行為と「気遣いのある」行為との関連が認められ、また、「気を使う」ことの難しさを前にした人びとの葛藤も窺われた。語りの分析においては、「気を使う」ことに関する痛みの記憶がコミュニケーション行為に影響しうることが明らかとなった。全体を通して、「気を使う」ことのマイナス要素、「気遣い」で評価されることに疲れや負担を感じる人びとがいることも示唆された。

現代韓国における「気」に関しては、鄭(1996)が述べているように、「気(기)」そのものが語句や慣用表現として残っている韓国語の表現は少なく、日本語の「気」表現に対応するものとして、心(마음)、気分(기분)、精神(정신)、性質(성질)、神経(신경)などの言葉を用いた表現が紹介されている。本研究では、韓国での日常のコミュニケーションにおける「気」について調査するため、2009年2月に10日間、現地へ赴いた。日本語を話す韓国人8人に行ったインタビューからは、次のようなことが認められる。日本語の「気を使う」「気を配る」などの慣用表現としての韓国語の表現は、先行研究にある通り、10個程度で数えるほどしかなく、鄭(1996)で紹介されている表現以外には、「기를 살려주다(元気づける)」「기가 세다(気が強い)」「기가 약하다(気が弱い)」が認められたのみである。

また、一般的には、鄭(1996)に示されているように、日本語の「気を使う」は「신경을 쓰다(神経を使う)」と訳されるが(直訳すると日本語の「気を使う」になる「기를 쓰다」という表現もあるが、その意味は「やっきになる」である)、人々の語りにおいては「感じとる能力(느치)」という言葉にも対応するところがあり、その「感じとる能力(느치)」は韓国社会において重要な意味を持っているようである。例えば、「느치를 보다(≒気を使う)」、「느치가 빠르다(≒気が利く)」などの表現があるが、「느치를 보다」は「顔色をうかがう」の意味により近く、他の表現に比べてマイナスの感情との結び付きが強い。上司に対する部下や姑に対する嫁などの、上下関係における目下が目上に対してしなければならない義務のように感じられ、圧迫感が伴っている。また、「느치가 빠르다」は良いことではあるが、自分を犠牲にしてまで「気が利く」ようにするのはよくないとされ、それほど望まれることではない。家族のように、良いことも悪いことも何でも言い合える関係の方が良いとされる。家族のような情(정)が重要視され、

研究成果の概要 つづき

「多情多感 (다정 다감)」な人や、多くの人々に「情 (정)」を配る人がよいとみなされる。

ジェンダーの視点から見てみると、日本では『「気が利く」女になれる 50 のルール』(浦野, 2005) という本があることから推察されるように、歴史的には女性の方が「気が利く」よう求められる傾向にあったが、韓国人へのインタビューの中では、男性が女性を気遣う方が一般的であるとの語りが多くなされた。また、日韓関係に関しては、『独立記念館』を訪問したところ、無数とも言えるほどの大韓民国の国旗がたててあったり、日本兵に虐待される韓国人のろう人形が多く展示されていたり、日露戦争や日清戦争の日本語訳が「露日戦争」や「清日戦争」という表現になっていたりと、戦争の記憶が人々のコミュニケーションに与えている影響の深さが窺われた。

中国においては、現在、「気」を「万物を構成する最小の物質的単位」としてとらえる傾向にある(前林ほか, 2000; 小野沢ほか, 1978)。また、彭(1996, 2004)によれば、日本語として定着した「気」という語に当てはまる中国語はなく、「精神」「神経」「注意力」「气」「心神」「心意」「心情」「心思」「心念」「心緒」などに訳され、「気を配る」「心を配る」「目を配る」といった「配る」の用法も中国語には認められないようである。

日本・中国・韓国における「気」について、日本に関しては、「気」の書記言語における通時期的変化が認められ、また、人々の相互行為、感情に関する「生きられた経験」の記述も行った。韓国に関しては、日本語のような「気」の慣用表現が少なく、代わりに他の表現が使われるが、その中でも、「感じとる能力 (느낀)」という言葉の重要性が示唆された。また、「気」表現に関する人間関係の特徴も認められた。中国に関しては、日本語の「気」に当てはまる語はなく、他の表現が使われることが示された。今後は、実際のコミュニケーションにおいて、どのようなことが為されているのか、言語表現だけでなく、相互行為・感情の面についてもより深く調査する必要があるだろう。

(引用文献)

- 赤川次郎・阿川弘之・芥川龍之介・安部公房・有島武郎・有吉佐和子ほか(1995).『新潮文庫の100冊:CD-ROM版』新潮社.
 赤塚行雄(1990).『「気」の文化論』創拓社.
 赤塚行雄(1996).「日本における『気』の歴史—文芸学的な一考察として」『日本語学』第15号, 9-19頁.
 青空文庫(2008).「青空文庫」2008年1月11日 <http://www.aozora.gr.jp> より情報取得.
 Borovoy, A. B. (2005). *The too-good wife: Alcohol, codependency and the politics of nurturance in postwar Japan*. Berkeley, CA: University of California Press.
 Chung, J., Hara, K., Yang, C., & Ryu, J. (2003). Contemporary Ch' i/Ki research in East Asian countries: Implications to communication research. 『異文化コミュニケーション研究』第15号, 41-66頁.
 土居健郎(2007[1971]).『甘えの構造』弘文堂.
 濱野清志(1987).「性格表現用語に使われる“気”の研究」『心理学研究』第58巻, 第5号, 295-301頁.
 濱野清志(2003).「気から見たトランスパーソナルな次元と個人のかかわり」『現代のエスプリ』第435号, 99-107頁.
 Hasada, R. (2002). 'Body part' terms and emotion in Japanese. *Pragmatics & Cognition*, 10, 107-128. Amsterdam: John Benjamins.
 前林清和・佐藤貢悦・小林寛(2000).『<気>の比較文化:中国・韓国・日本』昭和堂.
 Nagata, A. L. (2002). Somatic mindfulness and energetic presence in intercultural communication: A phenomenological/hermeneutic exploration of bodymindset and emotional resonance. *Dissertation Abstracts International*, 62(12), 5999B. (UMI No. 30379689)
 小倉紀蔵(1998).『韓国は一個の哲学である:「理」と「気」の社会システム』講談社.
 小倉紀蔵(2001).『韓国人のしくみ:「理」と「気」で読み解く文化と社会』講談社.
 小野沢精一・福永光司・山井湧(1978).『気思想:中国における自然観と人間観の展開』東京大学出版会.
 彭 飛(1996).『「気」『気配り表現』をめぐって』『日本語学』15, 76-83
 彭 飛(2004)『日本語の「配慮表現」に関する研究:中国語との比較研究における諸問題』和泉書院.
 Rosenberger, N. R. (1992). Tree in summer, tree in winter: Movement of self in Japan. In N. R. Rosenberger (Ed.), *Japanese sense of self*, (pp. 67-92). Cambridge: Cambridge University Press.
 Rosenberger, N. R. (1994). Indexing hierarchy through Japanese gender relations. In J. M. Bachnik, & C. J. Quinn (Eds.), *Inside and outside in Japanese self, society, and language*, (pp. 88-112). Princeton, NJ: Princeton University Press.
 佐藤喜代治(1996).『一語の辞典 気』三省堂.
 鄭 秀賢(1996).『「気」の語句をめぐる表現の日・韓対照研究』『日本語学』15, 69-75.
 山本七平(1997).『「空気」の研究』文藝春秋.
 湯浅泰雄(1991).『「気」とは何か:人体が発するエネルギー』日本放送出版協会.
 浦野啓子(2005).『「気が利く」女になれる50のルール』PHP研究所.

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。